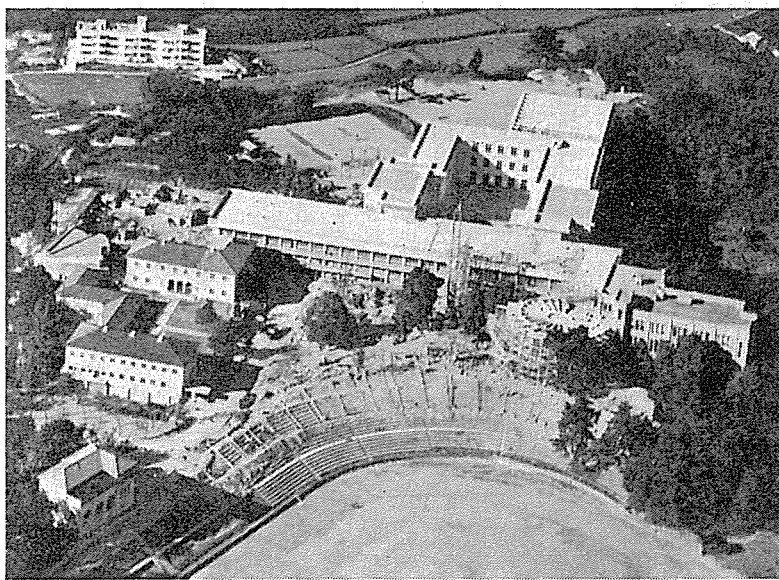


THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Oct. 30th, 1955. No. 284.

關西大學學報

昭和30年10月 第284号



竣工間近い第一学舎

關西大學學報局

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十年十月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二八四号

隠岐島の歴史と古文書

横田 健

今夏本学と島根大学と共同で行われた隠岐総合調査において私は歴史班担当を命ぜられたのであるが、以下にその調査概要を報告し、研究費を与えられた本学当局に対する義務を果たしたいと思う。

問題は隠岐島の歴史が日本史全体のうちに占める特殊性と、その特殊性を物語る史料がどれだけ、どのような形で残されているかということである。それとともに従来の研究はどの程度まで進められており、今後の研究はどう発展せしめらるべきかということである。隠岐島の歴史の特殊性は要は辺境海島的——それも山陰という中央よりへだたつた辺境よりなお一四八軒もはなれた孤島——という点にある。現地を歩いてみて、他の内地の地方に乏しいと思われる特殊な史料は流人、海運、牧畑関係、それにあげれば海論関係などであつた。これらはいずれもこの島の辺境海島の性格に基くものといえよう。

流人関係の文書は江戸時代のものしか

残っていないが、島後釜村の佐佐木家にかなり纏つてあり、中村上元屋岡部家にも若干があつた。この問題については知夫島古海の郷土史家横山彌四郎翁が一年「隠岐の流人」と題する大著を発行されており、この書は博覧された史料と長年の努力の結果成つたものであるから、今後これに附け加うべきものは多くあるまい。従来隠岐史上最も喧ましい問題であつた後鳥羽上皇、後醍醐天皇はその流人の中で最も顕著な存在であるが、これについては史料もすでに出揃つた観があり、今後重大な新史料の現れる見込は余りない。上代の流人についてはなおさることである。残された問題は流人を在地社会全般の構造において理解すること、また他地方の流人との比較的研究で、近世の刑法史全般の研究が非常に不足であるから、今後かゝる方面に研究が進められるべきであらう。これは在地社会経済史研究全般の進展と関係がある。第二に海運関係としては釜村佐々木家

文書には船主と船頭の性格、また航路や航海日数、運賃等について徴すべき史料があつた。黒木村大山明木村家の船宿帳は幕末より明治初年にわたる帆船航路と船形の推移などを知る好史料で、当時隠岐には全国とくに裏日本各地より商船が寄泊したことを知る。この研究は既に西郷高校教頭田中豊治氏が熱心に研究し成果をあげておられる。今後は裏日本主要港につき現地調査をなし、隠岐との交易関連を調査する必要がある。なおこの船宿帳によれば松前の船のとくに多いことが目をひいた。隠岐の島前は西島、中島、知夫島の三島よりなり、これは旧噴火口の陥没せる外輪山で、火口にあたる内海は極めて波静かな好泊地で、裏日本航行の船舶の中継基地であつた。島後の西郷湾も同様である。記紀神話にいう隠岐の三つ子の洲とは島前三島をいうものである。古代より商船の寄港したこと、日本後紀延暦十八年五月丙辰条に前遣渤海使内蔵宿禰賀茂麻呂等の奏言によつて明らかである。すなわち智夫郡の比奈麻治比売神は靈驗あり、商賈の輩海中に漂着するとき必ず火光をあげて、これにより全うするを得たるものあげてかぞうべからず、といふ遣渤海使らも火光により嶋に至るを得た。よつて神への贈位を乞うている。これによつても商船の多く附近を航行したことがわかる。この神火の話は今、中ノ島焼火神社のこととし

て伝えられている。

第三に牧畑のことは従来、経済史家や地理学者の注目研究してきたところである。現在も京都大学農学部三橋時雄教授が研究しておられる。現在牧畑を行つてゐるのは島前の一部にすぎないが、島後方面もかつては相当大規模に江戸初期より行つていたらしいことは釜村佐々木家文書等より明らかにし得る。隠岐視聽記などによつてもすでに江戸前期より、本島は他地方に比し戸数あたりに牛馬の数が非常に多いことが知られるが、これは牧畑の存在と関係があらう。今後、牧畑の存在状況を現地調査とあわせて古文書によつて変遷を追究するならば、もつといろいろのことを明らかにしうるのであらう。この問題は今後の島の経済問題に示唆を与えよう。

隠岐島は全島の九割が山岳森林地帯で耕地面積は約一割の二四七六町歩にすぎない。本島には四万四千八百余人の人口があるが、狭い島に資源も耕地も過剰人口に比して非常に乏しく、生き難い悩みはあだかも日本の縮図の感がある。主産業は農業で人口の八割が農民である。水産業に従事するものは二割にすぎない。林業は水産業につぐが、これはしたものである。かくて過剰人口は内地への出稼（主として東京、大阪方面と島根県一

これも研究課題の一つである）で解決せねばならない。この島の将来に關し、生産をいかに振興すべきか、私は島の有識者のいろいろの人にあつて問うてみたが、よい考えは皆余り持ち合わされぬようであつた。中に一人、中村の某氏は自分は牧畜をもつと振興することが救済策の一つであると思うと相當熱心に語られた。私も案に同感であつた。山岳地帯を農業と牧畜と兼ねて利用することには、この島は長い伝統と經驗を有し隠岐牛の声価は定評がある。これを酪農の方面で發展せしめることは今後極めて將來性があると思う。（今日は米だ市場が狭いから急にとはゆくまいが。）これには過去の牧畑の研究が寄与するであろうと考える。その他地方文書では海論關係（例えば加茂村橋本謙七氏所蔵文書）など興味のあるものであつた。

隠岐の特殊性には直接かゝりは少ないが、隠岐のみに残り、他地方では亡んだものとしては玉若酢神社の神主隠岐家に伝えられる駅鈴二箇、隠岐倉印、伝符各一箇等がある。これらについては一応先学の考証があるから、改めて取り上げべき問題は少い。倉印については正倉院文書の天平五年隠岐国正税帳に正倉印一枚とあるのはそれではないかもしれぬが、他に類似記載が殆んどないので興味深く考え合される。この正税帳は今後の研究によつていろいろの事實を物語る史料である。これをよむと智夫郡大領に海部諸石、海部郡少領に阿曇三雄、後道（今の隠地）郡少領に磯部直万得等の姓名がみられる。これら海部、阿曇、磯部等は何れも朝廷へ海産物を貢納する部名と考えられ、この地方郡司級の豪族にかゝる姓名をみることは大化前代より朝廷に海産物を貢納する部がこの地方に存在したことを推定せしめるのである。このことは延喜式卷二十四主計上に隠岐国の調として御取鯨、短鯨、鳥賊、熬海鼠、鰐鰓、雜膳、紫菜、海藻、鰯等が記されていることが参照されるのである。

隠岐の古代豪族としては先代旧事本紀国造本紀には、応神朝に額松彦伊呂止命五世孫十換彦命が隠岐国造に任ぜられたとある。その子孫と称する隠岐国造家がある。国造本紀の記事は記紀に傍証がないので真偽を確めるべきすべはない。しかし玉若酢神社神主隠岐家はその子孫といふ、前述の駅鈴、伝符、倉印等奈良朝の遺品を初め多くの由緒ある品を伝え、隠岐造の古風な堂々たる邸宅を構え、その歴史を誇つてゐる。足利義満時代に足利満幸を守護に任じ、次で尊氏の孫高詮を守護に任じたとき、隠岐氏は守護代に任ぜられたごとく、中世にも勢威をふるつてゐた。

この島の中世の歴史はやはり中央政変の影響は免れなかつた。庄園というべきものは余りなかつたらしいが、武家の勢力は強く及んでゐた。鎌倉幕府が佐々木定綱（近江源氏）を守護に任じてより、長く佐々木氏の支配下にあつた。建武中興以後、塩治氏、次で一時足利氏、山名氏等が支配したが、室町時代末には尼子氏が勢を張つた。毛利氏が起るや吉川広家が領した。島前黒木村市部の笠置家は鎌倉中期より戦国尼子時代に至る武家文書十数通を藏し、当地方中世の状況の一斑を察せしめる。中世文書の稀有な本島には貴重史料である。なお本島で窺目し得た中世史料としては都万村高田明神社に藏する金蓮寺淨阿勒進の百首和歌が室町初期のもので、同時代の高田明神縁起とともに、当地方同時代の信仰状況を察すべき好史料である。また焼火神社にも天文、永祿頃以後の文書を藏し、中世末以来の信仰並に關係の史料として、研究に値する。

近世初期の史料として戦後研究が進められつゝある検地帳に關しては各地に慶長十二年並に十八年に堀尾吉晴の卒を入れたものが残つてゐる。その中でたゞ一冊慶長四年に吉川広家の行つた別符検地帳が黒木村役場にあつた。広家は翌五年の関ヶ原の戦に西軍に参加し、その所領を沒收された為、検地を継続できなかつたので、慶長四年の検地帳が他にあまりみられないのであると推定される。検地帳の研究は今後集計分析することによつて何らかの成果を見出し得よう。

江戸時代の文書は各地に多く遺存してゐるようであるが、今回見得たところでは、釜村佐々木家には江戸初期より明治に至るまで各種の文書がそろつていて、一村の集中的研究に大いに役立つと思われた。中村上元屋阿部家文書は故横地満治氏が島後各地の文書を苦心して蒐集書写されたもので一ヶ所に居ながらにして、各地の文書を利用できる点貴重である。黒木村役場も同地方の文書がよく集つてゐる。中村赤沼家所蔵の勤王志士中沼了三の書翰類も幕末の京都の動きを知る上に大切なものである。今回の調査は各地を急ぎ瞥見したにすぎず、本格的調査は今後に残されている。未調査の所はずつと多いので將來もつと面白い発見もあることと期待される。歴史研究には考古学、民俗学等と関連して考えるときらに興味ある問題も考えられるが、後日を期したいと思う。（文学部教授）

学内報

修士記授与式

関西大学大学院修士記授与式は九月三十日午前十時より千里山大学院学舎に於て、修士記授与、岩崎学長告辞、中谷部長式辞、白川理事長祝辞の式次第で厳粛に挙行された。

本日は特に、被授与生一人々々に岩崎学長より修士記を授与された。

修士記を授与された者

法学研究科 十四名

文学研究科 五名 計十九名

四学部長改選

四学長の改選は、九月四学部教授会においてそれぞれ選出され、十月一日付にて理事会で任命された。

法学部長 植田重正教授

文学部長 三木 治教授

経済学部長 森川太郎教授

商学部長 賀屋俊雄教授

なお学部長代理には、池垣定太郎(法)金子又兵衛(文)、杉原四郎(経)、河野稔(商)各教授がそれぞれ選ばれた。

新学部長略歴

植田重正学部長

京大法卒、本学講師、助教授、教授、

(法学部)

法学部次長、同部長、大学院兼務、法

博

三木治教授

京大仏文卒、本学講師、予科教授、教

授(文学部)

森川太郎教授

関大経卒、本学講師、助教授、教授(経

済学部)、経済学部長、図書館長、大学

院兼務、経済学博士

賀屋俊雄教授

東大法卒、パリ・ペルリット外国語

学校卒、本学講師、教授、(経済学部後

商学部) 商学部次長、同部長

人事異動

昭和三十年九月三十日付

教授 福 島 四 郎

任期満了につき法学部長を解く

昭和三十年九月三十日付

教授 池 垣 定太郎

任期満了につき法学部長代理を解く

昭和三十年九月三十日付

教授 三 木 治

任期満了につき文学部長を解く

昭和三十年九月三十日付

教授 壺 井 義 正

任期満了につき文学部長代理を解く

昭和三十年九月三十日付

教授 三 谷 友 吉

任期満了につき経済学部長を解く

昭和三十年九月三十日付

教授 沢 村 栄 治

任期満了につき経済学部長代理を解く

昭和三十年九月三十日付

教授 板 橋 菊 松

任期満了につき商学部長を解く

昭和三十年九月三十日付

教授 植 野 郁 太

任期満了につき商学部長代理を解く

昭和三十年十月一日付

教授 植 田 重 正

法学部長に補する

昭和三十年十月一日付

教授 池 垣 定太郎

法学部長代理に補する

昭和三十年十月一日付

教授 三 木 治

文学部長を命ずる

昭和三十年十月一日付

教授 金 子 又兵衛

文学部長代理を命ずる

昭和三十年十月一日付

教授 森 川 太 郎

経済学部長に補する

昭和三十年十月一日付

教授 杉 原 太 郎

経済学部長代理に補する

昭和三十年十月一日付

教授 賀 屋 俊 雄

商学部長に補する

昭和三十年十月一日付

教授 河 野 稔

商学部長代理に補する

昭和三十年十月一日付

教授 賀 屋 俊 雄

商学部長に補する

昭和三十年十月一日付

教授 河 野 稔

商学部長代理に補する

昭和三十年十月一日付

教授 河 野 稔

商学部長代理に補する

昭和三十年十月一日付

教授 河 野 稔

商学部長代理に補する

昭和三十年十月一日付

教授 河 野 稔

商学部長代理に補する

昭和三十年十月一日付

教授 河 野 稔

社会経済史学会近畿部会 九月例会開催

社会経済史学会近畿部会では、九月十八日(日)午後一時より関西大学第二学舎(経商)会議室に於いて九月例会を開催。この日千里ヶ丘は折からの秋雨に煙り、例会出席者の出足が気遣われたが、三十余名の参加者をもって盛會裡に例会を終った。

当日、研究報告は都合により、今夏米国より帰朝された京都大学経済学部長堀江保蔵教授より「米国旅行の印象」と題する同教授の経済学者としての眼に映じた米国に対する印象、学会の消息等諸般に亘つての詳細な話によつて代へられ、例会出席者一同の社会経済史学に対

する一層の関心と自覚が昂められた。例会終了後引き続き、堀江教授帰朝歓迎の懇親会を開催し、会員相互の親睦を深めた。尚本学より同学会へ、岩崎学長、矢口、魚澄、鐔方、横田各教授、荒井助教授、津川助手が出席した。

日本商業英語学会

日本商業英語学会第十五回大会は九月十七・十八日の両日に亘り、十七日は伊藤忠商事株式会社に於て、伊藤忠商事並びに大阪貿易協会後援の下に、学会出席者五十四名に、本学から賀屋、山崎、富山、山口の諸教授が加わり、貿易協会側から大阪貿易協会会長・日商会長高畑精一氏を始め実業家三十五名の参加をみ、講演並びに実業家との研究懇談会が行われた。

講演

「貿易の現状」 大阪貿易協会会長 高田精一氏

「国民貿易運動」 大阪貿易協会専務 浜野恭平氏

「Dome Aspects of Business Correspondence Tea-ching」 元英商神戸領事館 現神戸市外国語大 現神戸商科大学 現神戸商科大学 現神戸商科大学

等があり、高畑氏並びにMr. Pardonは流暢なる英語で以て、又浜野氏はユーモアに富んだ講演をなされ、一同を満喫させた。又実業家との研究懇談会に於ては、実業者側から「大学に於ける商業英語の教授に關しての依頼、質問があり、学会から「大学に於ける商業英語の実社会に於ける効果」等、種々なる意見が交換され、大学に於ける学問の在り方に些か考えさせられる所があつた。

關西大學創立七十周年記念 學術論文応募者一覽

さきに關西大學創立七十周年記念行事実行委員会が、記念事業の一つとして本學學生に學術論文を募集し、兼ねて學生の研究成果発表の機会を与えようと試みたが、各學部より優秀な論文が多数応募した。學部別にみると、法學部一八名二〇篇、文學部一一名一篇、經濟學部一五名、一六篇、商學部四名四篇、短大二名二篇計五〇名五三篇となつてゐる。

なお論題、學部學年及び氏名を挙げると次の通りである。

論 題	學部學年	氏 名
1 自然法概説	法二(一部)	熊本 格也
2 法と道徳との關係について	" "	三好 健三
3 教育講話	" "	岡野 拓也
4 法の民主化	" "	岡野 拓也
5 公法と私法と社會法	" "	岡野 拓也
6 法は誰の爲に存在してゐるか	" "	廣澤 明彦
7 國家の特質	"一(二部)	和田 清孝
8 憲法上内閣總理大臣の權能	"四(一部)	細海 好路
9 自衛戰爭に關する日本國憲法第九條の法理	"三"	木村 誠
10 憲法裁判所と日本國憲法第八十一條の法理	" "	北川 均
11 警察官が行う職務質問の限界に關する一考察	"四(二部)"	白木 清一
12 國際法と國內法に關する若干の問題	"三(一部)"	堀尾 吉郎
13 家族制度の復活を批判する	"四"	大竹 近香
14 未帰還の夫との離婚	"三"	山本 隆男
15 取締役の行為の制約	"三"	川中 治作
16 独禁法と独占形態の進行	"四"	佐藤 敏雄

17 教育刑主義論考	"三"	宮崎 忠満
18 教育刑について	" "	久保潤司郎
19 江戸時代に於ける穢多・非人の役割	"四"	谷口 勝巳
20 詩と現代	"三"	笠原 宏也
21 存在論について Heidegger と Sartre より	文四(哲)	渡辺 幸博
22 作品研究「エリシス」	"三(英)"	田中 米雄
23 大人になつてからの英語習得は可能か	"三(二・英)"	叶 兼光
24 Stendhal における Incise	"(一・仏)"	梅垣 浩一
25 一説に La Chartreuse de Parme について	"二(一・史)"	出水 睦巳
26 歴史の転換期について	"三"	林田 雅朗
27 南北朝正統論より觀たる現代歴史敘述の方法	"四(一・國)"	吉原 榮徳
28 日記から日記文學へ	"(二・國)"	奥谷 朝雄
29 近松と曾根崎心中について	" "	関 豊
30 四谷怪談にみられる類魔期江戸の世態に關する一考察	"(一・新問)"	宇江 信治
31 獨占公共企業體における P・R の問題	"四(二・史)"	福島 守
32 新憲法の精神は守られてゐるか	" "	大森 裕和
33 經濟問題としての失業理論	" "	木名瀬 弘
34 貨幣と物価との關係	" "	西 徹也
35 占領下の隷屬的な戦后日本財政の特質に就いて	" "	阿部 槌雄
36 日本貿易の現状	"四"	田中 充
37 日本經濟の現状と將來に關する構想	" "	上曾山 良樹
38 価格調整公団に關する若干の考察	"(二部)"	工藤 五郎
39 我國の勞働人口の過剩性に關して	"(二部)"	葉山 芳一
40 日本資本主義に於ける日本農業の地位	"(二部)"	葉山 芳一
41 資本主義發達の經濟史的考察	"三"	羅川 勝美
42 商業革命から産業革命までの一つの試論——ギルドと資本主義成立の關係	"(二部)"	中川 晴夫
43 石田梅巖の經濟思想	"(二部)"	角山 幸洋

第二日目の十八日は本學大學ホールに於て開催され、充實した研究報告と質疑応答が行われた。

「教育としての商業英語」 早稲田大學 伊東克巳
「On Vocational Education and Business English」 山陰短期大學 島居 助三
「商業英文に於ける工夫」 神戸商科大学 三戸 雄一
「Incidents 1963 に於ける改正点」 關西學院短期大學 鈴木信五郎
「アメリカ雄観」 同志社大學 原 猛雄
「EX Ship Terms and Verified Terms」 神戸市外國語大學 中井省三
「冷凍魚類の輸出契約について」 東京女子大學 北沢 佐雄
「名目と實質」 大阪外國語大學 森沢 三郎
「What Are Good Business Letters?」 東京銀行 中内 正利

等の研究報告があり、活潑なる質疑応答が行われ、予定を上廻る時間を費消し、盛會裡にその幕は閉ざされた。

43 株式会社金融の特性と変遷	"(一部)"	田中 憲三
44 定期取引復活問題をめぐつて	" "	堤 多嘉男
45 完全就職への考察	"四"	水村日出夫
46 學問の民主化と國語育て方の問題(大人の語)	"二"	水村日出夫
47 會計理論に於ける資本二重循環式の提唱	前四(二部)"	大杉 裕英
48 財産評價基準に就いて	"三"	塩谷 俊造
49 商法と會計原則の立場	" "	植木 英夫
50 戦後十年を経た日本農業經濟の現状とその特性	"四"	野 茂
51 經營學的剩餘価値	"二(二部)"	水谷 哲男
52 通貨の歩み	短大(二部)"	長久 幸造
53 通貨の歩み	"二"	加賀谷敬二

日本に於ける

キエルケゴールの文獻

天野敬太郎

萬里小路通宗

この文獻目録は今から百年前の十一月十一日に亡くなったデンマークの哲學者ゼーレン・キエルケゴール（一八一三年五月五日—一八五五年十一月十一日）の百年祭に因んで編成したものである。その範圍は明治時代から最近（昭三〇・一〇・一現在）に至る迄に發行されたキエルケゴールの著作の邦訳とキエルケゴールに関する圖書及び雜誌論文等を収録し、辭書・事典・新聞の類及び單行本の中の一節は除いた。但し特に古いもの又は比較的頁数の多いものは収録した。

順序はA選集（發行順）、B著作（年代順）、Cキエルケゴールに関する文獻（著者及び執筆者のABC順）とした。Bにおいては各々原題を掲げ、次に独訳を括弧で包んだ。部分訳についてはその原題の頭に「」を付けて明確にした。雑誌・論文集の中に収録のものは各々の題名の後に括弧に入れて記し、単独の論文集の類には〇印を付けた。發行年月は各項の最後に記し、昭三〇は昭和二十五年五月發行を意味する。

A 選 集

- キエルケゴール選集 第一三卷 改造社
- 一、不安の概念（伊藤郷一訳）現代の批判（三木繁訳）死に至る病（菅内吉・大村晴雄訳） 昭三〇・一一
- 二、基督教に於ける訓練（桑田秀延訳）懼れとおのゝき（鬼頭英一訳）誘惑者の日記（神保光太郎訳） 昭三〇・一〇
- 三、アイロニーの概念（三木清・榊田啓三郎訳）反復（榊田啓三郎訳）瞬間（藤本正高訳） 昭三〇・一二
- キエルケゴール選集 第一三卷及別卷 人文書院
- 第一三卷 あれか・これか 芳賀檀訳
- 一、第一部 昭三一一
- 二、第一部の続 昭三三
- 三の二、第二部の続 昭三六
- 四、恐怖と戦慄 石中象治訳 昭三〇・一〇
- 五、人生航路の諸段階（上） 昭三八
- 六、同（下） 中沢治樹訳 昭三五
- 七、不安の概念 高橋幸雄訳 昭三九
- 八、哲学屑 石中象治訳 昭三〇・一〇
- 九、愛について 大谷長訳 昭三二
- 十、死に至る病 芳賀檀訳 昭三八
- 片山泰雄訳 昭三三

B 著 作

- 一、誘惑者の日記 飯島宗享訳 昭三〇・一〇
- 二、哲學的断片 大谷長訳 昭三二
- 三、死に至る病 飯島宗享訳 昭三〇・一〇
- 四、我が著作活動の視点・瞬間 田淵義三郎訳 昭三〇・一〇
- 五、On Begrebet Ironi med stadigt Hensyn til Socrates. (Über den Begriff der Ironie mit ständiger Rücksicht auf Sokrates) 1841. 三木清・榊田啓三郎訳 アイロニーの概念 改造社
- 六、Enten-Eller. I. (Entweder/Oder. I) 1843. 芳賀檀訳 あれか・これか 第一部・第一部の続 人文書院 昭三一一・一二
- 七、宮原晃一郎訳 憂愁の哲理（キエルケゴール選集 第一二卷）春秋社 昭三五
- 八、同（世界大思想全集 第三卷） 昭五〇
- 九、同（春秋文庫 第三部 4） 昭八五
- 十、飯島宗享訳 あれか・これか 第一部 角川書店 昭三四
- 十一、同 美しい人生観 角川書店 昭三五
- 十二、De umiddelbare erotiske Stadier eller det Musicalske-Erotiske. (Die Stadien des unmittelbaren Erotischen oder das Musikalische-Erotische) 1843. 宮原晃一郎訳 人格完成の美的倫理的均衡について（憂愁の哲学の中） 昭五〇
- 十三、角 信雄訳 快樂と絶望 思索社（思索選書） 昭三三
- 十四、飯島宗享訳 ドン・ジュアン論 塙書房 昭三五
- 十五、Den første Kjaerlighed. (Die erste Liebe) 1843. 飯島宗享訳 初恋 角川書店 昭三九
- 十六、Forførelsens Dagbog. (Tagebuch des Verführers) 1843. 神保光太郎訳 誘惑者の日記 改造社（キエルケゴール選集 第二卷） 昭三〇・一〇
- 十七、同（改造文庫） 昭三三
- 十八、同 三笠書房（世界文学選集） 昭三〇・一〇
- 十九、飯島宗享訳 誘惑者の日記 角川書店（哲學選書） 昭三〇・一〇
- 二十、同 エール選集 第一卷（キエルケゴール選集 第三卷 1・2） 昭三六
- 二十一、Enten-Eller. 2. (Entweder/Oder. 2) 1843. 芳賀檀訳 あれか・これか 人文書院 第二部・第二部の続 昭三六
- 二十二、同（キエルケゴール選集 第三卷 1・2） 昭三六
- 二十三、—Aegteskabets æsthetiske Gyldighed. (Das ästhetische Recht der Ehe) 1843. 飯島宗享訳 結婚の美的權利 角川書店（哲學選書） 昭三三
- 二十四、—Ligevægtens mellem det Æsthetiske og Ethiske i Personlighedens Udarbejdelse. (Das Gleichgewicht des Ästhetischen und Ethischen in der Entwicklung der Persönlichkeit) 1843. 宮原晃一郎訳 人格完成の美的倫理的均衡について（憂愁の哲学の中） 昭五〇
- 二十五、角 信雄訳 快樂と絶望 思索社（思索選書） 昭三三

- Frygt og Baeven; dialektiske Lyrik.
(Furcht und Zittern; dialektische Lyrik) 1843.
- 鬼頭英一訳 懼れとおのゝき 改造社
(キエルケゴール選集 第二卷) 昭三10
同 懼れとおのゝき―弁証法的抒情詩
大地書房 昭三4
- 石中象治訳 恐怖と戦慄 人文書院
(キエルケゴール選集 第四卷) 昭三8
Gjættelsen; Et Forsøg paa den experimenterende Psychologi. (Die Wiederholung; Ein Versuch in der experimentierenden Psychologie) 1843.
- 榊田啓三郎訳 反復 改造社
(キエルケゴール選集 第三卷) 昭三12
同 筑摩書房
(キエルケゴール著作集) 昭三10
- Philosophiske Smuler eller En Smule filosofie. (Philosophische Brocken oder ein Brocken Philosophie) 1844.
- 矢内原伊作訳 哲学的断片 角川書店
(哲学選書) 昭三5
大谷 長訳 哲学屑 人文書院
(キエルケゴール選集 第八卷) 昭三2
同 哲学的断片 創元社
(キエルケゴール選集 第三卷) 昭三2
Begrebet Abgæst. (Der Begriff der Angst) 1844.
- 伊藤郷一訳 不安の概念 改造社
(キエルケゴール選集 第一卷) 昭三11
同 (改造文庫) 昭三5
- 田淵義三郎訳 不安の概念
(美知 第一一二輯) 昭三12
- 石中象治訳 不安の概念 人文書院
(キエルケゴール選集 第七卷) 昭三10
弘瀬 潔訳 不安の概念 角川書店 昭三3
齋藤信治訳 不安の概念
(岩波文庫) 昭三7
Stadier paa Livets Vej. (Studien auf dem Lebensweg) 1845.
- 中沢治樹訳 人生航路の諸段階 (上) 人文書院 昭三5
高橋幸雄訳 人生航路の諸段階 (下) 人文書院 昭三7
(キエルケゴール選集 第五一六卷)
— In vino veritas. 1845.
- 吉田健一・堀田善衛訳 追憶の哲理 大地書房 昭三8
Afsultende uvidenskabelig Efterskrift til de filosofiske Smuler. (Abschliessende unwissenschaftliche Nachschrift zu den philosophischen Brocken) 1846.
- 鬼頭英一訳 哲学的断片後書 三笠書房
(現代思想全書) 昭三10
同 評論社 昭三6
Nutiden. (Die Gegenwart) 1846.
- 三木 繁訳 現代の批判 改造社
(キエルケゴール選集 第一卷) 昭三11
飯島宗享訳 現代の批判 創元社 昭三11
Kierlighedens Gjenninger. (Leben und Walten der Liebe) 1847.
- 芳賀 檀訳 愛にいつつ 人文書院
(キエルケゴール選集 第九卷) 昭三8
同 (創元文庫) 昭三11
Hedningenes Bekymninger. (Die Sorgen der Heiden) Stemminger i Lidsers Strid. (Stimmungen im Leidenskampf) 1848.
- 後藤 平訳 人は如何にして信仰を得るか 実業之日本社 昭三7
Synspunktet for min Forfatter-Virkomhed. (Der Gesichtspunkt für meine Wirksamkeit als Schriftsteller) 1848.
- 田淵義三郎訳 我が著作活動の視点 人文書院
(キエルケゴール選集 第三卷) 昭三7
同 創元社
(キエルケゴール選集 第八卷) 昭三7
Lilien paa Marken og Fuglen under Himlen. (Die Lilie auf dem Felde und der Vogel unter dem Himmel) 1849.
- 久山 康訳 野の百合空の鳥 弘文堂
(アテネ文庫) 昭三2
赤岩 榮訳 野の百合と空の鳥
(指 7号) 昭三6
Har et Menneske Lov til at lade sig ihjelslaae for Sandheden? (Hat ein Mensch das Recht, sich für die Wahrheit totschlagen zu lassen?) 1849.
- 横山喜之訳 人は真理のために殺されぬ権利をもつか 新教出版社 昭三9
- Om Forskjellen mellem et Genie og en Apostel. (Über den Unterschied zwischen einem Genie und einem Apostel) 1849.
- 橋本 鑑訳 使徒と天才との相違について 長崎書店 昭三8
同 新教出版社 昭三9
Sydommen til Døden. (Die Krankheit zum Tode) 1849.
- 菅田吉・大村晴雄訳 死に至る病 改造社
(キエルケゴール選集 第一卷) 昭三11
齋藤信治訳 死に至る病
(岩波文庫) 昭三11
松浪信三郎訳 死に至る病 小石川書房 昭三5
同 三笠書房 昭三5
同 パンセ書院 昭三9
同 河出書房 (世界大思想全集 哲学文芸思想篇 三) 昭三6
同 安中登美夫訳 死に至る病 史学社 昭三7
片山泰雄訳 死に至る病 人文書院
(キエルケゴール選集 第十卷) 昭三3
飯島宗享訳 死に至る病 創元社
(キエルケゴール選集 第六卷) 昭三7
Indpølse i Christendom. (Einübung im Christentum) 1850.
- 桑田秀延訳 基督教に於ける訓練 改造社
(キエルケゴール選集 第二卷) 昭三10
井上良雄訳 イエスの招き―キリストの修練 (角川文庫) 昭三11
To Taler ved Aftergang om Fredagen.

- (Reden zur Kommunion am Freitag) 1851.
 横山喜之訳 聖餐式のための説話 新教出版社 昭三7
 —Kjerlighed skal skule Syndernes Mangfoldighed. (Die Leben deckt der Sünden Menge) 1851.
 久山 康訳 愛は多くの罪を掩ふ 弘文堂 (アテネ文庫) 昭三11
 Til Selvfryelse Samtiden anbefalet. (Zur Selbstprüfung der Gegenwart anbefohlen) 1851.
 佐藤信一訳 自己検察の為に 角川書店 昭三4
 同 わが魂の戦ひ—自己検察のために 角川書店 昭三11
 Guds Uforanderlighed. (Gottes Unveränderlichkeit) 1855.
 横山喜之訳 神の不変性 (福音と時代 四卷3号) 昭三3
 同 (福音と時代 四卷3号) 新教出版社 昭三7
 Øjeblikket. (Der Augenblick) 1855.
 藤本正高訳 瞬間 改造社
 (キエルケゴール選集 第三卷) 昭二12
 山田新之助訳 瞬間 人文書院
 (キエルケゴール選集 第十卷) 昭三10
 田淵義三郎訳 瞬間 創元社
 (キエルケゴール選集 第八卷) 昭元7
 Papier. (Papiere)
 大谷 長訳 許嫁への手紙 人文書院
 (キエルケゴール選集 別卷) 昭三1
 同 婚約 (三笠文庫) 昭三4
 大谷 長訳 日記 人文書院
- (キエルケゴール選集 第三卷) 昭三7
 玉林義憲・久山康訳 キエルケゴール 一八四七・四八年の日記 (「季刊」基督教 第1—2号) 昭三11—昭三3
 同 キエルケゴールの日記 弘文堂 (アテネ文庫) 昭三6
 梶田啓三郎訳 さまよへるユダヤ人—キエルケゴールの日記 (高原 第9—10号) 昭三15
 同 絶望の淵より—キエルケゴール「日記」抄 (至上律 7号) 昭三2
 飯島宗享訳 キエルケゴール備忘録 一—六 (基督教文化 第27—32号) 昭三7—12
 梶田啓三郎訳 審判者の書—主体性への自覚 (表現 一巻3・4号) 昭三8—9
 横山喜之訳 説教集 新教出版社 昭三10
 正清敬之助訳 神と人間との関係 (指 38号) 昭元1
- ドリンガー編 陶山務訳 キエルケゴールの言葉 第一書房 昭二7
 同 日本社 昭三5
- C キエルケゴールに関する文献
 安倍能成 可能性に対する情熱 (〇山中雄記 岩波書店) 大正8
 同 キエルケゴールの恋愛 (〇山中雄記 岩波書店) 大正8
 赤岩 栄 バスカル・キエルケゴール・ドストエフスキー (〇新宗教 論大系 第二卷 五月書房) 昭三11
 秋山英夫 ニヒルと神—キエルケゴールとニイチエ
- ルとニイチエ
 社会思想研究会出版部 昭三7
 秋山山英 キエルケゴールに於ける「詩人的実存」(知と行 四卷3号) 昭三3
 東専一郎 キエルケゴールに於ける信仰と倫理 (哲学研究 三卷8号) 昭二8
 紅松保雄 キエルケゴールの審美的著作について (研究 神戸大学文学会) 哲学篇 6 昭三3
 墓地 清 大谷 長ヲ見ヨ
 茅野蕭々 キエルケゴール (〇世界文学講座 二 北欧文学篇 新潮社) 昭五8
 同 キエルケゴールの「あれか・これか」(文芸 三卷5号) 昭二5
 藤本正高 キエルケゴールの教会批判 一—八 (日本聖書雑誌 72—79号) 昭二12—17
 同 キエルケゴールの教会批判 土肥書店 昭二2
 藤田健治 キエルケゴールのヘーゲル批判 (一橋論叢 三卷2号) 昭二8
 古市恵太郎 ヘーゲルの自覚とキエルケゴールの自覚 (徳島大学学芸学部紀要 人文科学 1号) 昭三2
 原田信夫 キエルケゴール Leben und Wollen der Liebe に於ける愛について (基督教研究 三卷3号) 昭二4
 同 キエルケゴール Christliche Reden に現れた弁証法について (基督教研究 四卷1号) 昭二10
 同 キエルケゴールの「瞬間」概念について (基督教研究 四卷3号) 昭三4
- 同 弁証法的契機としての「顕き」の可能 (基督教研究 二卷3号) 昭三4
 同 キエルケゴールに於ける Existenzについて (基督教研究 二卷3号) 昭三4
 同 キエルケゴールに於ける Entweder/Oder の概念について (基督教研究 一七卷3・4号合併号) 昭三7
 同 ケルケゴールの基督教思想 新生堂 昭三9
 ヘフディングH 哲学者としてのキエルケゴール 鳥井博朗訳 第一書房 昭二9
 同 キエルケゴールの個性 鳥井博朗訳 (セルパン 56号) 昭二10
 弘瀬 潔 キエルケゴールの実存哲学 平国社 昭三3
 同 「デモニッシュなるもの」について (遺稿) (理想 269号) 昭三10
 久山 康評 橋本康訳「使徒と天才との相違について」横山喜之訳「人は真理の為に殺される権利をもつか」説教集 (基督教文化 32号) 昭三11
 飯島宗享 キエルケゴールと実存 (肉体 二卷4号) 昭三8
 同 「死に至る病」について (解説) (基督教文化 40号) 昭三10
 同 キエルケゴールに於けるロマンテイズムの問題 (理想 198号) 昭三11
 同 キルケゴールにおけるキリスト教と教会について (理想 269号) 昭三10
 池島重信 キエルケゴールの人間学 (浪漫古典 7輯) 昭九10
 同 ニイチエとキエルケゴール

- (理想 62号) 昭二11
石津照塵 ヘーゲルとキエルケゴール
の対比 (理想 20号) 昭五11
同 キエルケゴールの宗教論に関する
吟味一二 (哲学雑誌
第80-81号) 昭六11
同 憂鬱の哲学—キエルケゴールに於ける
現代的要素(改造三卷3号) 昭五3
同 宗教的実存の現代的課題—キエル
ケゴール諸著作の位置と意義—一二
(哲学研究 第三卷12号卷1) 昭五79
同 キエルケゴールの思想の基盤
(文化 二卷2号) 昭三3
同 北欧のキエルケゴールの研究其の
他 (理想 28号) 昭三10
伊藤源一郎 キエルケゴールのソクラ
テス的なものにおける実存哲学的
概念 (哲学論叢 2輯) 昭二6
ヤスベルスK 異端者—ニイチエ・キ
エルケゴール・マルクス 高橋義高
訳 (人間 六卷5号) 昭六5
ジョンソンH 現代実存主義の批判者
としてのキエルケゴール(講演要旨)
土山牧燕通訳 田中熙筆記
(関西大学学報 271号) 昭三8
同 キエルケゴール理解の鍵 菅内吉
後藤真訳 創元社 昭六11
金子筑水(馬治) キヤークゴールドの人
生観(早稲田文学・第三期9号) 昭五9
同 (○文芸及哲学論集 金子馬治著
理想社) 昭三5
桒山欽四郎 弁証法的矛盾と実存
(フィロソフィア 20号) 昭六7
- 片山正直 キエルケゴールに於ける死
の理解(○死の理解論文集) 昭三12
勝部謙造 キエルケゴールの哲学的方
法 (精神科学 2号) 昭二2
鬼頭英一 キエルケゴールに於ける
「ヘーゲル」 (理想 18号) 昭四11
小林一郎 キエルケゴールト(日本百
科大辞典 第二卷 三省堂) 昭四6
高坂正顕 キエルケゴールと道化芝居
—反復の一考察(芸文 1号) 昭三7
同 キエルケゴールからサルトルへ—
実存哲学研究 弘文堂 昭四4
高山岩男 キエルケゴールと実存哲学
(○哲学と哲学的実存 弘文堂) 昭三10
熊野義孝 キエルケゴールの人と思想
(経済往来 二卷5号) 昭二5
同 キエルケゴール (○廿世紀思想
第六 河出書房) 昭三12
同 キエルケゴールとバルト—神学的
弁証法について(理想 18号) 昭四11
国谷純一郎 誘惑者—キエルケゴール
に於ける弁証法的実存
(初雁 二卷3号) 昭四3
国谷純一郎評 武藤一雄著「信仰と倫
理」—キエルケゴールの問題
(基督教文化 48号) 昭五8
畔上賢造 北欧の予言者をおもふ
(日本聖書雑誌 77号) 昭二5
桑田秀延 キエルケゴールの弁証法的
神学 (理想 62号) 昭二11
レギットK キエルケゴールとニイチ
エ 北山淳友訳(理想 39号) 昭八4
同 キエルケゴールとニイチエ
- 中川秀泰訳 弘文堂 昭六1
同 キエルケゴール 柴田治三郎訳
(○ルソーよりニイチエに至る市
民社会の問題 筑摩書房) 昭三11
同 ヘーゲル・マルクス・キエルケゴ
ール 柴田治三郎訳 要書房 昭三3
同 ヘーゲルからニイチエへ—十九世
紀の思想に於ける革命的決裂 マルク
スとキエルケゴール—二 柴田治三
郎訳(岩波現代叢書) 昭四4—六6
毎日新聞社編 あれか・これか(解説)
(○増補世界の名著 同社) 昭三4
栢田啓三郎 キエルケゴールの根本思
想 (理想 62号) 昭二11
同 キエルケゴールに於ける「単独者」
の範疇—その成立と意味について
一二(理想 第178-179号) 昭三8—9
同 キエルケゴールの日記から—一二
(高原 第9—10号) 昭四4—5
同 キエルケゴール文献解説—研究者
への手引として(理想 18号) 昭四11
同 内部と外部—ヘーゲル批判への出
発 (理想 18号) 昭四11
同 キエルケゴール
(○哲学講座 三 筑摩書房) 昭五2
同 単独者と超人—キエルケゴールと
ニイチエ (理想 26号) 昭五7
同 キエルケゴール
(○哲学名著解題 春秋社) 昭三4
同 キルケゴール文献
(理想 28号) 昭三10
三木 繁 キエルケゴール「死に至る
病」(哲学評論 二卷3号) 昭三7
- 三土與三 静歌 一二 (講座 11—
12号 大村書店) 大三12—三1
宮原晃一郎 キエルケゴール(○大思想
エンサイクロペディア 春秋社) 昭四10
同 憂鬱孤独の思想家キエルケゴール
(思想春秋 34号) 昭五9
同 キエルケゴールの芸術観
(浪漫古典 7輯) 昭九10
務台理作 キルケゴールの現代的意義
(理想 28号) 昭三10
室伏高信 あれか・これか
(○青年の書 モナス) 昭二4
同 同 第四書房 昭二8
武藤一雄 キエルケゴールに於ける実
存と現実 (叙説 3輯) 昭三10
同 キエルケゴールに於ける瞬間性の
問題 (基督教文化 33号) 昭四2
同 宗教的実存の現代的課題—キエル
ケゴールに就ての一考察
(理想 18号) 昭四11
同 信仰と倫理—キエルケゴールの問
題 法蔵館 昭五5
同 キエルケゴールの宗教哲学—シユ
ライエルマツヘル及びバルトとの関
聯について (理想 28号) 昭三10
武藤光朗 キエルケゴールとマルクス
(理想 18号) 昭四11
中村一彦 あれか・これか研究
(倫理学年報 四集) 昭三8
中沢治樹 若きキエルケゴールに於け
る宗教的実存の問題—レギーネ事件
を中心として(理想 18号) 昭四11

- 同 キエルケゴールの基督教 (独立 18号) 昭三10
中沢臨川・生田長江編 キアルケガアルドとイブセン
(○近代思想十六講 新潮社) 大412
同 (同 新潮文庫) 昭八
新島 繁編 キエルケゴールのゼーレン
(○社会科学文献解題 2
哲学・教育篇 東峰書房) 昭三3
同 (同「学生版」春秋社) 昭三8
同 死に至る病【解説】 2
(○社会科学文献解題 2
哲学・教育篇 東峰書房) 昭三3
同 (同「学生版」春秋社) 昭三8
野口芳雄 キエルケゴールの於ける絶望と実存 (三重大学
学芸学部研究紀要 13号) 昭三3
小川圭治 実存の三段階と倫理の問題 (理想 269号) 昭三10
大小島真二 キエルケゴールの実存段階 (関西大学研究論集7文学哲学篇) 昭三11
同 キエルケゴールの絶望概念 (関西大学研究論集9文学哲学篇) 昭三12
同 キエルケゴールの於ける瞬間の問題 (関西大学研究論集13文学哲学篇) 昭三14
同 キエルケゴールの実存哲学 カホリ書房 昭三7
大田黒作次郎 キールケゴールド・ゼーレン (哲学大辞書 1 同文館) 明登
大谷 愛人 キエルケゴールの思维方式 (哲学 29号) 昭三3
- 同 キルケゴールにおける逆説の概念 (理想 269号) 昭三10
大谷 長「墓地清」神以前一ケルケゴールとの一つの貧しき同感 人文書院 昭三
同 キエルケゴール「単独者」概念成立史の一考察 一二
(哲学雑誌 第712-713号) 昭三1011
同 キエルケゴールの「受取り直し」 (哲学研究 三巻9号) 昭三4
同 キルケゴールに於ける授受の弁証法—キルケゴール基礎研究序章 弘文堂 昭三10
同 国際キルケゴール会議に出席して (理想 269号) 昭三10
大谷 剛 ケルケゴールと運命の意識 (コギト 五巻12号) 昭三12
理想社編 キエルケゴール研究 昭三2
ロバートES キエルケゴールとサルトル—実存主義に於ける信仰と自由 佐古純一郎訳 (福音と世界 七巻4号) 昭三6
三枝博音 弁証法談叢の七 (○弁証法談叢 世界書院) 昭三6
齋藤忍随「反復」前後のケルケゴール (叙説 3輯) 昭三10
齋藤信治 キエルケゴールに於けるイロニーの概念 (理想 198号) 昭三11
同 キエルケゴールのソクラテス解釈 (理想 第239-240号) 昭三45
同 ソクラテスとキエルケゴール—イロニーの概念 芸芸書房 昭三4
同評 和辻哲郎氏「ゼーレン・キエルケゴール」批判 (書評 8号) 昭三11
佐々木一義 キエルケゴールの実存哲学に於ける自己の問題 (哲学年報 10号) 昭三4
佐々木俊次評 ザスラフスキー「現代ブルジョア哲学に於ける白痴と痴人」—ソワイエツトのキエルケゴール論 (理想 267号) 昭三8
信太正三 水平化問題の一系譜—ヤスパースとキエルケゴール (実存 4号) 昭三3
須田豊太郎 キエルケゴール (北海 道大学文学部紀要 4号) 昭三3
杉本吉雄 一般者に対する反逆の問題—キエルケゴールの質的弁証法に関する一考察—「白塔」(山脇学園学術研究会誌)第6—10号 昭三2—35
同 絶望の概念に就いて (白塔別冊 二輯) 昭三3
陶山 務 キエルケゴールの思想と生涯 壯文社 昭三6
同 キエルケゴールの恋愛と性格 (知と行 五巻2号) 昭三2
鈴木三郎 キエルケゴールからヤスパースへ (哲学評論 創刊号) 昭三3
同 キエルケゴールとヤスパース (理想 269号) 昭三10
田淵義三郎 キエルケゴール雑考 (美知 1輯) 昭三1
高橋 亘 キエルケゴール宗教的人生 (思想 235号) 昭三12
同 絶対と深淵—ヘーゲルとキエルケゴール 育英書院 昭三10
- 同 実存哲学と弁証法 (哲学評論 二巻3号) 昭三7
同 キエルケゴールの弁証法 (○弁証法ノート 潮流社) 昭三12
同 キエルケゴール 新教出版社 昭三11
竹下直之 キエルケゴールの実存弁証法 (理想 62号) 昭三11
玉井 茂 社会危機とキエルケゴールの哲学 (哲学評論 三巻1号) 昭三1
田丸徳善 キエルケゴール宗教思想の形成—とくにヘーゲルとの連関を通じて (宗教研究 126号) 昭三12
田辺 元 実存の単独性と無の社会性—キエルケゴールを中心として (展望 11号) 昭三11
同 宗教の倫理性—キエルケゴールをめぐる (展望 13号) 昭三1
同 実存と愛と実践 筑摩書房 昭三12
田中弘道 キエルケゴールに於ける「不安」と「飛躍」について (山口大学文学会誌 四巻2号) 昭三
戸田伊助 ルターとキエルケゴール (基督教文化 57号) 昭三7
鳥居正夫 実存哲学研究—「キエルケゴールからハイデッガーへ」(午前 三巻7・10四巻3号) 昭三9・12・三3
魚木忠一 ヘーゲルの弁証法に対するキエルケゴール並びにバルトの修正 (基督教研究 九巻2号) 昭三12
和辻哲郎 ゼーレン・キエルケゴール (改訂新版 筑摩書房 昭三8
八木武三郎 実存に於ける真理の根源 (15頁をつづく)

(一) 女 房 払 下

春 原 源 太 郎

江戸時代の特殊な刑罰として女子だけに科する「奴」という罰がある。

御定書百ヶ条によれば、関所を除け山越したり、忍び通りの者に対する刑罰として男は磔、重追放等になつていたが、女の場合は「男に誘はれ山越」又は忍び通りに対して奴という特殊な刑罰に処することになつてゐた。山越とか、海上船を利用して関所を避けるとか、多くは女をつれた者が関所を除けて通つたために罰せられてゐるが、主犯の男は磔や重追放になるのに奴という刑罰に処せられた女はどうなるか。

奴になつた女は「望之もの有之候へば遣」とあるから無料で払下になることになる。ただし「望候もの無之内は牢内に差置」なので希望者があるまで牢内に置かれることになる。奴という身分に落された女は片附けるというので、希望者を求めるために「御目付江申達御殿詰合面々え相達候様ニ可致被致且望候者有之候ハ、可被相渡」町方

は町年寄へ申付け貰いたいという者があれば遣すことになつてゐる。

余り多くは

見当らないが実例によつてみると「御仕置例類集」明和九年「女を連御関所除山越いたし候一件」に甲府金平町六兵衛娘「密通之上、被誘引出、小仏御関所山越」によつて奴に当る事件があり、寛政六年大阪町奉行何にも江戸馬喰町家主長右衛門下女密通のことが主人夫婦に知れ、手を切るようにされるというので二人が大阪から江戸へ欠落する際に、関所改めのある場所を除け山越をしたというので奴に処せられた例がある。

これら幕府の裁判に於てもしばしば量刑の問題が見られるように処罰に寛厳があり、右の事件や寛政十一年武州百姓の妻下女奉公中密通の上相手と箱根を山越をした事件で、裁判の前例として引用されている例中に、信州の百姓の娘がかどわかされ見知らぬ男に山駕籠に乗せられ、薙をかけ道中見えないうようにして宿に着き、男はこの女を二三年売の相談をして外出したので夜中逃出した事件は、関所山越とせず、

処罰しなかつた例があり、これを引用して急度叱りですんでいる。

たゞし奴に処せられるのは男につれて山越した場合で、寛政八年板倉周防守何には女が男に連れられたのではなく、名前も知らぬ女に道を教えられ、自ら山越した場合には遠島に処せられてゐる。

前記小仏山越事件の評定所評議で問題になつた法律論は、この刑に処せられた女が早速望の者があれば、その者に遣すというので奴という罪名になつてゐるのであるが、望の者がなければ牢内に差置くことになつてゐるから、望の者があるまでは「永牢之形」になつて永牢という重き御仕置と同じ結果になる。この例で特に問題になつたのは牢屋類焼で在牢者を放し、立滞つた者には一等を減じたところ奴という刑罰が右の如きものであるために一等を減ずる規定や先例がない。望の者を待つてゐたのでは永牢と同じことになる。と云つて親へ引渡したのでは御咎の形がとれないというので、結局親六兵衛へ引渡、三十日押込ということにしている。

望の者があつて引渡した例を探してみると「大阪市史」に天明五年正月十八日奴に処せられた女を望の者に下さる旨の達があり、長崎屋利右衛門女房みつ(三十一才)というのが「右之もの此度やつこに被仰付候、望之者有之は可被下置候間、御願申上候様被仰渡候」とあり、望の者を求めるため町々末々まで洩れざる様に触知らせてゐる。この女は同年二月三日「養育願人有之、被下置候」と貰ひ手がある。「徳川禁令考」にある例はもつと詳しく、天保二年四月「長崎遊女二而、元本田近江守足輕島田惣之助妻、舞袖事たき及び木挽町六町目勘五郎方居候、歌扇事かね」の二人が奴に処せられ、前記殿中詰合の者に望の者があれば申出ることゝ町年寄への達がある。貰ひ手には制限があり「由緒」なき者でなければならなかつた。そして貰ひ受けた者は「譜代に召仕」うこと及び「親類並身寄之もの江決而通路等為致間敷」ことが必要で、貰ひ受けた女は親類等の交際を断つことを条件とされた。従て婚姻法から云えば刑罰による強制離婚が生ずる。

右二人の女は四月に奴に処せられ六月二十九日に引渡され、町役人一同々道して引渡されてゐる。尙若しこの女に「異変」があると早速訴出なければならなかつた。譜代に召仕うということであるが、貰ひうけた女のその後のことについては資料がない。

(理事)

西日本学生陸上競技対抗選手権に

優勝



九名点取戦（本学関係分のみ記載）
 関西学生選抜 4 1 2 米 国
 初段 三原（天理大） 崩れ横 ハリス
 " 永井（立命大） 四方固め " ラッブ
 二段 東元（天理大） 崩れ横 " ラッブ
 " 新田（同大） 合せ業 二段 メーリー

なるか？

第一戦に京大に連勝したが、同大第一回戦、一ヶ月ばかり試合から遠ざかつたが、優勝第一関門で敗退するかと思われたが、第二戦、投手、中西（経二）の投打の活躍によつて同大を4—1で敗り決勝に持ち込み、徐々にはあるが打力が回復しているので、此の一戦に勝目を期待出来ると思われる。今秋の優勝の向背は同志社戦にある。若し此れに敗れるとますます優勝圏から遠ざかることになりかねない。今迄の戦績は次の通りである

十日午後二時十分から大阪府立体育館で行われた。当日の記録は次の通りである。

葉山ヨットハーバーにて

剣道部では八月二十日より二十九日まで高松体育会館で合宿した。参加人員は左の通り。

OB 山中、名 両先輩参加十五名





校 友 会

校 友 会 常 議 員 会

九月十五日(月)午後五時半より天六
学舎附属一中会議室で岩崎会長、三好、
久井、長柄副会長出席のもとに開催。本
年度校友総会並びに創立七十周年記念祝
賀会に関する件を審議し、校友新聞「関
大」に関する経過報告を行った。

千里山昭八会

九月十六日(金)午後五時半より国鉄
豊崎寮にて第三十五回例会を開催。今回
は有馬の奥から、また京都方面から来た
り会する者多く、愈々昭八会の根強さが
滲透して来たように感ぜられる。幹事よ
り雑件の報告があり、次で母校七十周年
記念式典を迎えるに当り昭八会もこの機
会を逸せず、地方会員の来会を勧招し、
盛大な例会を持つべく種々と意見や論議
があつたが、これについては十月例会に
於て具体的に決定することに申合せて、
例に依つて小宴に入る。六ヶ年間も机を
並べて苦楽を共にした者が二十名も集る
と誠に愉快な雰囲気醸し出すものである。
田坪、中家、大島氏等から清酒その
他の寄贈があつて万丈の気焔に更に拍車
をかけるものがあつた。宴は何時果て

か、時の過ぎるも忘れれた盛大さ、名残
りを惜しみつつ学歌を高唱して散会した
のが十時半であつた。

出席者

長沢 健一 結城 丙太 斎藤 正興
田辺 卓起 北村文之助 中村 重男
宮脇 三郎 浜田 実 西村 善雄
中江 翼 中家 利家 普泉光之祐
木下 忠夫 藤本順二郎 大島 武夫
藤岡 勇 田坪 弘 浦野健二郎
吉田 一郎 平井 三朗

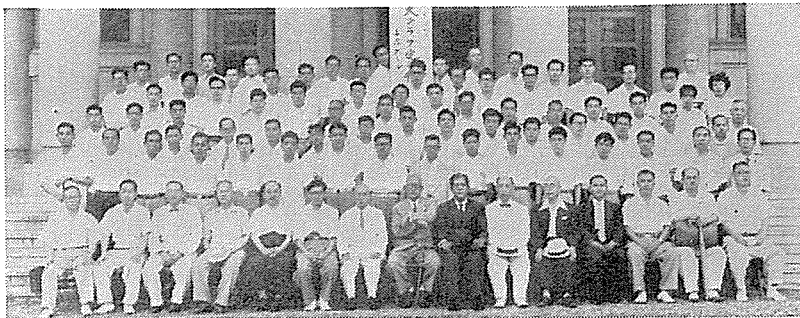
神戸支部

七月三十日(土)午後二時より新卒者
の入会歓迎会を兼ね生田区海岸通りの神
戸商工会議所で開催。当日は七十周年祝
賀の盛儀を偲び、海外留学から帰朝せら
れた堀、広瀬、高木の三教授を招聘して
欧米の学界消息や、見聞奇談に時の過
るのも忘れて聴講した。

大学側

岩崎 学長 白川理事長 堀 教授
高木 教授 広瀬 教授 安井校友課長
倶楽部側
山崎 敬義 永本 信夫 下条小野右衛門
赤井 定雄 山本 春治 水本千代松
向井 裕亮 難波 方 橋本 太一
貴客 喜客 飯村猪之助 杉村 守清
小川 立朝 飯沼健二郎 老田 唯雄
森 又雄 榎本 昭 瀨野 清市
角田幸太郎 岡田芳太郎 岡本 徳
岡橋 好也 岡野重三郎 細見 順三
星野 直身 田口 悦司 中谷 朋夫
鶴谷 重雄 酒井 宗一 竹谷 益一
河野 博 河合 義雄 那須 久一
中村 康彦 大屋 隆雄 大野 幸雄
大脇 明 安福 集 道端 正明
前田 正司 前田 好明 村上 民二
田中 剛 真垣 夏生 安田 正男
小林 幹治 小坂 道一 木村 崇

植村 茂 上田 実宏 中村 武巳
中野 正喜 中西 博美 淡本 洋一
池田 善久 稲田 正三 清水 官二
塚田 圭一 広瀬 省三 原田 伶
菊池 圭一 淵崎 邦郎 李 相徳
山本 友春 横谷 和道 永原順太郎
上月 満 国弘 惇 林 重幸
林 隆之 野村 喜昭 中村 勝夫
辻本 竜巳 佐伯 文男



大阪市経済局関大会
才一回総会

神 戸 支 部 総 会

母校創立七十周年を迎えその多彩な行
事に呼応して、吾が大阪市経済局の同窓
も風薫る六月十日(金)午後六時より、
大阪市設寮校之宮会館でさやかな歓談
の宴を張り母校発展の喜びを俱にし、最
後に学歌斉唱、母校の万歳を三唱九時半
散会した。

因みに今後の連絡場所は大阪市商工貿
易相談所長、横内弘文宛(電福七三三番)
に願います。右世話役横内弘文、大槻四
郎

出席者

本西 久雄 岡村 忠男 三木 芳男
勝田 武男 大槻 四郎 井上 英男
役谷 嘉彦 山田 幸夫 高島 順吉
北浦 弘 竹内 正 堀川 正道
奥原 正男 平本 重雄 樋口 正一
江口 清 杉本 勲 谷原 保
宮本 淳弘 宮野 敬三 山上 恵市
辻本 忠雄 福原 直章 横内 弘文

高知支部

昭和三十年度秋季総会は八月二十日午
後二時、高知市中島町保護会館で開催。
支部長岡内静一議長となり議事進行、
役員改選を全員一致で左記の通り再選し
た。

会長 岡内 静一 副会長 井上 和夫

幹事 島井 範男 山崎 登

引続き懇親会に移り席上学歌の斉唱と自
己紹介の後、長山顧問、井上副会長の懐
旧談に花を咲かせ午後五時散会した。

出席者

青木 敬直 井上 和夫 今城 敦夫
大川 邦昭 岡内 静一 川崎 了
島井 範男 田村進一郎 高松 幹男
竹内 誠一 戸堀 賢 長山 直樹
西森 岩喜 西内寛三郎 藤岡 志朗

(15頁に続く)

關西大學創立七十周年記念 拡充資金募集趣意書

わが關西大學は、明治十九年河内町の一隅に、大阪に於ける唯一の法律学校として開校したのでありますが、爾來六十有余年校友先輩の苦心と不断的の努力に依つて目覚ましい發展を遂げ、今や一万数千の学徒を擁する私学の雄として、自他共に許す一大學園となりました。其の間幾多の俊英を輩出して、文化の向上、國家社會の進運に大きな寄与をなしたことは、われわれの深く喜びとするところであります。學園發展のために尽瘁せられたそれらの先輩各位に対しては深甚の敬意と感謝を捧げずには居られせん。

日本は、漸く獨立國家として出發しましたが、國家の前途は甚だ多難であります。わが國は今後、文化國家として世界文化に貢獻すべきであります、またそれによつて友邦の信に應えなければなりません、そのためには、教育の振興こそ最も緊要な問題であります。

本學は、大學の崇高な使命を自覺すると共に、歴史と伝統に立脚して、よくその声価を揚げて参りましたが、真理の討究、學の實化という理想に向つて、益々邁進したいと思ひます。本學が新學制に基き、各大學にさきがけて、大學院を設置し、修士課程並びに博士課程を開講したのも要は、その意味において將來の飛躍的な發展を意圖したからに外なりません。

本學は時代の趨勢に鑑み、曩に五ヶ年計畫を樹て、諸施設の改善充実に着手致しました。千里山における大學院、大學ホール、経済学部 商学部 法学部教室の増築等は、その一環として既に竣工しましたが、なお計畫中の事業で、しかも緊急を要するものが種々残されて居ります。即ち、使用上すでに危険な状態にある、千里山法学部學舎の改築、二部學生を收容するための天六學舎の増築、學生に対する施設の一部として、千里山尚志館（學生食堂學友會部室）の増改築等であります。これらは逐次工事に着手し或は着工準備中であり、また教授研究室は、現在六十五室を有するに至つたのでありますが、その大部分は、臨時的なもので、更に近代設備を持つ研究室の新築を構想中であり、これらが竣工の暁には學園は全く面目を一新すると思ひます。

こうした外觀の整備と相俟つて、特に重要なものは、大學の眞価を決する教授陣容の充實であります。二十八會計年度においては教授十名、助

教授八名、専任講師五名、助手十七名の増員を予定しましたが、その大半はすでに補充致しました。

教職員待遇については、常にこれが改善に努め、本年度においても相当額の増俸を実施致しました。しかしなお現下の經濟状態に即応すべき所期の目的を十分に達し得て居ないのを遺憾と致します。

教授陣容の充實と共に、研究用圖書の完備も大切であります、この点についても目下鋭意努力して居ります。

さて、上記の事柄は、いづれも緊急を要するものと考えられますが就中、學舎の増改築は、最早一日も遷延を許しませんので、これを早急に達成するため、昭和三十年度に創立七十周年を迎えるのを機会に、その記念事業の一部として実施することに致しました。しかも、建築費だけでも総額約三億円を要するのでありますが、戦後の經濟的混亂により本大學法人の經理も、種々困難な事情を加えており、従つて事業遂行の資金は、止むを得ず關係者各位その他の御援助により御醸出を仰がねばならぬ実情にあります。

大學の生命は不朽であります、學園の生々發展を希うためには、各位の學園に寄せられる深い愛情と熱意に俟たねばなりません。翼くは、學園の繁榮を念願する各位の御賛同を請ひ、この七十周年記念事業の完成を期したいと思ひます。各位の御賛同により本事業完成の暁には、學園はさらに新たな基盤に立つて飛躍的な發展を期し得ることを信じます。何卒御協力の程切に願ひ上げます。

昭和二十八年十一月

關西大學學長 岩 崎 卯 一
關西大學理事長 白 川 朋 吉

創立七十周年記念事業學舎増改築概要

一、工事費總額約三億三千五百万円

二、工事概要

- (一) 千里山 法学部 學舎改築（鉄筋コンクリート造）
 - 三階建 二千六百六十八坪 工費約二億六千四百万円
- (二) 天六學舎増築（鉄筋コンクリート造）
 - 五階建 三百七十八坪 工費約三千万円
- (三) 千里山尚志館増改築（木造）二階建 三百二十一坪 工費約六百万円
- (四) 關西大學第一高等學校の千里山外苑への移転新築（一・二階鉄筋三階木造）三階建 七百八十五坪 工費約三千五百万円